

山古志

山古志へようこそ！

山古志は、緑豊かな森林に覆われた山々とその間の狭い谷に囲まれた 14 の集落で構成されています。この地域に人々が居住し始めた正確な時期は不明ですが、「古志」という名前は 9 世紀からの歴史文書に記載されています。1618 年には、この地域は新たに形成された長岡藩に組み込まれ、その後多くの小さな村は「山古志の村」として総称されるようになりました。19 世紀後半、新政府の明治政府によって日本全土で境界が再編成された際、この地域は正式に一つの統一された村となりました。

山古志の各集落には、創設家族や起源、特定の特徴を反映した伝統的な名前があります。その中には「(多くの) 榎の木」、「菖蒲 (が咲くころ)」、あるいは「油 (を作る) 夫」といった意味を持つ名前が含まれています。これらの集落は比較的孤立しているため、住民たちは代々独自の伝統的な習慣や儀式を保存し、受け継いできました。

17 世紀から 19 世紀まで、住民の多くは主に農業に従事しました。山の急斜面の棚田で米を作り、棚池で鯉を飼っていました。現在でも、農家や鯉の養殖業者は、この環境の維持・

保全に力を入れています。色鮮やかな夕日が水面に映る初夏や、霧に包まれる早朝の山々の風景は特に印象的です。

山古志の多くの伝統的な家には、牛を飼うための屋内厩舎がありました。山古志の傾斜が急であるため、牛は馬よりも農作業や運搬に適していました。動物たちが作物の植え付けや収穫に関与していないとき、彼らは時々娯楽としての役割を果たしました。雄牛は「角突き」と呼ばれる試合で互いに力比べをします。角突きは他の闘牛とは異なり、両方の動物が力を示した時点で必ず引き分けとなります。これは、重傷を負うと働けなくなってしまうため、明確な勝者と敗者が生まれると村人の中に悪感情を生む可能性があるからです。現在、山古志は日本で闘牛文化を保存している、わずか9箇所の一つです。

もう一つ、いまだに盛況を極める伝統的な産業は、錦鯉と呼ばれる鑑賞用の鯉の繁殖です。これらのカラフルな魚は、「生きた宝石」と称されることもあります。かつては、無地の黒い鯉が食用として養殖されていました。魚は稲作と共に成長させるために水田に放たれて、成長した魚は専用の棚池に移されました。冬の大雪が降る前に家庭の池に移され、冬期のタンパク源として養殖されていました。観賞目的で魚を飼育するようになったのは19世紀初頭で、無地の黒い鯉の中に赤い模様の鯉が発見されたことがきっかけだと言われています。それ以降、より多くの色を引き出すための選択的繁殖が行われ、約100種類の異なる錦鯉の模様のバリエーションが生まれました。長岡市では150の商業及び趣味のブリーダーが運営しており、そのう

ち約 90 が山古志にあります。

風光明媚な山村を散策する際には、風景に点在する多くの鯉の池、牛小屋、棚田や棚池にぜひ注目してください。これらは、何世紀にもわたって受け継がれてきた伝統と、山古志が美しく活気のある場所でありつづけるような現代的な取り組みの、両方を表しています。